

夜風が窓の隙間から忍び込みカーテンの裾を僅かに揺らしている。築何十年になるか分からないこの屋敷は、どれだけ窓を閉め切っても何処からか風が通り抜けていくようなそんな不思議な造りをしていた。

天井の高い洋室のベッドに横たわり、枕元のランプだけを灯して文庫本を開く。古い紙のにおいと、微かに黴びた屋敷の空気が混じり合って鼻腔をくすぐるその感覚にももうすっかり慣れてしまった。ページを捲る乾いた音だけが部屋に響き、穏やかな夜がゆるゆると更けていく。

その静寂を、いつものように彼が打ち破った。

「報告であります!!」

腹の底から響くような大音声が部屋中の空気を震わせ

私の手から文庫本がぼろりと落ちた……のは、もう何週間も前の話。今ではこの唐突な大声にも身体が驚かなくなっている自分がいる。

ベッドに寝そべったまま声のした方へ視線を向けると、部屋の中央に一人の男が佇んでいた。身体の輪郭が僅かに透けて向こう側の壁が薄く見えることを除けば、生きた人間と何ら変わらない存在感を放つ男。

この屋敷の地縛霊、史輝<sup>しき</sup>。

「本日の巡回、異常なしでありました。……沙織<sup>さおり</sup>殿、また夜更かしでありますか」

咎めるような口調とは裏腹に、切れ長の目がほんの少しだけ和らいでいるのを私は見逃さない。怖い顔、大きな声、軍人然とした立ち居振る舞い。初めて会った日に

は腰を抜かして声も出なかったというのに、今ではこの仏頂面すら妙に安心する。おかしい話だ。

思い返せば数週間前のこと。親戚から半ば押し付けられるようにしてこの古い屋敷を譲り受けたのが全ての始まりだった。元は軍の施設だったらしいという話だけは聞いていたけれどまさか本当に当時の住人がまだ残っているとは思ひもしなかった。引っ越しの段ボールを開けている最中に背後から響いた怒号。振り返った先に立っていた壁が透ける軍人。あの夜は一睡もできなかった。翌朝、恐る恐るリビングに降りると、彼は直立不動の姿勢で私を待っていて深々と頭を下げたのだ。

『驚かせて申し訳ないであります。自分はこの施設の

……元所属兵であります』

敵意がない事はその丁寧すぎる態度からすぐに伝わった。それでも最初の数日は距離を置いていた私に彼は決して無理に近づこうとはしなかった。遠くからそっと見守るような不器用な気遣い。やがて私の方から声をかけるようになり、夕食の時間に他愛もない話を交わすようになり、気がつけば毎晩のように同じ部屋で過ごすことが当たり前になっていた。

「夜更かしじゃないですよ、まだ十一時」

「軍の消灯時間はとうに過ぎていますであります」

「ここはもう軍じゃないです」

そう返すと史輝は少しだけ困ったような顔をして、それから小さく笑った。笑うと案外柔らかい顔になるのだ、

この人は。幽霊だけれど。

私はベッドの上に起き上がり縁に腰掛けた。史輝はいつの間にか私のすぐ近くに立っている。軍帽の庇の下から覗く瞳がランプの灯りを受けてちらちらと揺れる。暖色の光に照らされた彼の横顔は、幽霊だということを一瞬忘れさせるほどに確かな温度を感じさせた。

「……ねえ、史輝さん」

「何でありますか」

「初めて会った日のこと、覚えてます？」

「忘れるはずがないであります。沙織殿が来た日、自分はどれほど嬉しかったか」

さらりと重いことを言う。この人はいつもそうだ。不意打ちのように胸を突く言葉を、本人は何でもないよう

な顔で口にする。

私は何も言わずに手を伸ばした。指先が彼の頬に触れる。ひんやりとしているけれど確かにそこに在る感触。生きている人間の肌とは違うどこか滑らかで乾いた冷たさ。それでも私の掌は彼の頬の輪郭をはつきりと捉えている。

「触れられる幽霊だなんて、不思議なものですね」

呟くように言うとき、史輝は一瞬だけ目を見開いた後ゆっくりと白手袋の手を持ち上げた。革と布越しの指先が私の頬にそっと添えられる。手袋の下から伝わる冷たさが肌をじんわりと痺れさせる。

「……不思議でありますな」

低く柔らかい声。普段の大音声からは想像もつかない

ような静かな響き。彼の指先が頬の輪郭をなぞるようにそつと動いた。見上げた先にある表情はどこか切なげで、どこか嬉しそうで。その目に宿る光が何を意味しているのか、その時の私にはまだ名前をつけることができなかった。

あの夜からまた数日。古い屋敷での暮らしにもすっかり慣れ、日々はおおむね穏やかに流れていたのだけれどこの日は少しだけ事情が違った。浴室の問題だ。

この屋敷は元が軍の施設だっただけあって水回りの設備が妙に古い。蛇口は捻るたびに軋むし、排水溝は時折おかしな音を立てるし、給湯の温度は気まぐれに上下する。それでも普段は騙し騙し使っていたのだが、この日

に限ってシャワーのヘッドが根元からぼろり、と外れた。湯を止める間もなく壊れた接続部から熱い湯が噴き出し、慌てて蛇口を閉めようと身を乗り出した拍子に濡れたタイルの上で足が滑った。

咄嗟に壁を掴もうとした手は虚しく空を切り背中から派手に滑って尻餅をつく。衝撃で息が詰まったのと同時に脱衣所の向こうから地鳴りのような声が轟いた。

「何事でありますか!!」

返事をする暇もなく史輝が浴室の扉を開け放って飛び込んできた。湯気の向こうに臨戦態勢の軍人の姿。問題は……私が糸纏わぬ状態で濡れたタイルの上にへたり込んでいるということだ。

「っ……」



声が出なかつた。羞恥よりも先に痛みと驚きで頭が真っ白になっていたせいもある。史輝は一瞬だけ硬直した後状況を把握したらしく、視線をさつと逸らしながらも大股で近づいてきた。

「怪我は！ 怪我はないでありますか！」

「だ、大丈夫、です……滑っただけ……」

「立てるでありますか。手を」

差し出されたその手を反射的に掴む。引き起こされる力の強さに思わずよろめき、勢い余って彼の胸にぶつかった。軍服の硬い布地が濡れた素肌に触れる。冷たい身体のはずなのに、密着した瞬間に感じたのは、不思議な安堵だった。

「あ……すみませ」

「動くなであります。足を挫いていないか確認する」

有無を言わさぬ口調で史輝は私の足元に片膝をつき、足首を両手で包むようにして触れた。指先が踝のあたりを丁寧に確かめていく感触に、裸であることへの羞恥がようやく追いついてきて顔が一気に熱くなる。見上げた彼の横顔は真剣そのもので、こちらの裸体など目に入っていないかのような徹底した冷静さ。それが余計に気恥ずかしい。

「腫れは見られないであります。しかし念のため、冷やした方がよいかと」

「は、はい……あの、史輝さん、私いま」

「服はそこに掛かっているであります。自分は外で待機する」

それだけ言うと史輝は踵を返して浴室を出ていった。扉が閉まる寸前、彼の耳の端が赤く染まっているのが見えた気がした。気のせいかもしれない。幽霊が赤面するなんておかしい話だから。

バスタオルを巻いて脱衣所に出ると史輝は律儀に廊下で直立不動の姿勢を取っていた。私の姿を見るなり、ぎこちなく頷く。

「着替えたでありますか。よし。……その、先ほどは失礼した」

「いえ、助けてもらったのはこっちですから。ありがとうございます、史輝さん」

「……当然のことをしたまでであります」

短いやり取りの後、彼は巡回に戻ると言って姿を消し

た。私は自室に戻りベッドに腰を下ろす。タオルで髪を拭きながらさっきの出来事を反芻。

濡れた素肌に触れた軍服の布地。足首を包んだ手の確かな力強さ。片膝について見上げてきた切れ長の瞳。耳元に落ちてきた低い声。

駄目だ。思い出すだけで身体の芯がじんわりと疼き始める。タオルを絞る手が止まる。太腿の内側を、言いようのない熱がゆつくりと這い上がっていく感覚。心臓が不穏な速さで脈を打ち始め呼吸が僅かに浅くなる。

……考えすぎだ。相手は幽霊。あんな状況で変なことを考える方がどうかしている。そう自分に言い聞かせながらベッドに潜り込み布団を頭まで被った。目を閉じる。けれど瞼の裏に浮かぶのは史輝の横顔。白手袋の指先。

耳の赤み。あの低い声。

身体が疼いて仕方がない。布団の中で何度も寝返りを打ち枕に顔を埋め、それでも一向に治まらない熱に私はとうとう観念した。そつと右手を下腹部に滑らせ下着の縁に指を掛ける。恥ずかしい。こんなこと、普段ほとんどしないのに。でもこの熱を放っておいたら眠れそうにない。

『史輝さん』。名前を心の中で呼んだ瞬間指先が自分の秘部に触れた。既にじわりと濡れている感触に頬が燃えるように熱くなる。あの人のことを考えただけで、こんな。

下着の上から恥丘を押さえそつと円を描くように動かす。微かな快感が腰の奥に走り、無意識に唇を噛んだ。

足首を掴んでいた白手袋の感触を思い出す。あの手がもつと上に。太腿を辿り、奥へと伸びてきたら。

下着の脇から指を滑り込ませ割れ目に沿ってゆつくりと撫でる。粘ついた湿りが指先に絡みつき、小さな水音が布団の中に籠もった。クリトリスの先端にそつと触れた瞬間、びくりと跳ねる腰。声を殺して、唇の隙間から細い息が漏れた。

「……ん……っ」

あの大きな手で触られたら。低い声で名前を呼ばれたら。あの硬い胸板に押し付けられて、逃げられなくなつたら。

指の動きが徐々に速くなっていく。思考が溶けるように甘くなり、妄想の中の史輝がどんどん鮮明になってい

く。手袋を外した素手で直接触れられる想像。荒い吐息が耳にかかる想像。「ここでありますか」なんて真面目な顔で訊かれる想像。

下腹部の奥で熱の塊がぎゅうと凝縮されていくのが分かる。もう少し。もう少しで……。

「報告であります!!」

その声が轟いた瞬間、絶頂の手前で張り詰めていた全身の弦が全く別の方向に弾け飛んだ。

「ひっ……!!?」

心臓が口から飛び出すかと思った。慌てて股間から手を引き抜き布団を頭まで引き上げる。嘘でしょう。このタイミングで。よりにもよって今このときに。

「沙織殿、消灯時間をとうに過ぎています。まだ起きて……」

言いかけた史輝の声が、不自然に途切れた。

布団の中で息を殺す。心臓がうるさい。ばくばくと耳の奥で鳴り響いてそれ以外の音が何も聞こえない。空気が変わったのが布越しにも分かった。数秒の沈黙がどれほどの長さに感じたか、やがて、ゆっくりとした足音が近づいてくる。

「……沙織殿」

低い声。いつもの怒号じみた大音声ではない。押し殺したような妙に落ち着いた声色。

「布団を、取ってもらえるでしょうか」

「……いやです」



「沙織殿」

「いやです、出ません、帰ってください」

「自分は巡回の最中であり、不審な状況を確認する義務が」

「不審じゃないです、寝てただけです」

「嘘でありますな」

断定だった。声の温度が変わった気がして布団の端をぎゅっと握りしめる。返す言葉が見つからない。沈黙が部屋を満たし壁時計の秒針の音だけが静かに刻まれている。すると突然、布団の端がぐいっと引かれた。

「ちよ、待っ……」

抵抗する間もなかった。尋常でない力で布団が剥ぎ取られ冷たい夜気が一気に素肌を撫でる。薄いキャミソ―

ルに下着だけの姿。しかもその下着はずらしたままだった。慌てて直そうとした手首を大きな手がやんわりと、抗えない力で押さえた。

「……やはり」

見上げた先に史輝の顔があった。軍帽の庇の下双眸がいつもとは明らかに違う光を帯びている。怒りではない。呆れでもない。爛々と輝く瞳は獲物を前にした獣のそれに似ていた。口元にはうっすらと笑みすら浮かんでいる。

「沙織殿、自慰行為をしていましたね」

「……してない、です……」

「下着がずれているであります。それに」

手首を押さえたまま史輝の視線がゆっくりと下がって

いく。太腿の内側を伝う微かな光沢。自分の指に残る言い逃れのできない痕跡。

「……匂いがする」

耳まで真っ赤になるのが自分でも分かった。空いている方の手で顔を覆おうとしたけれど遮るように史輝が身を屈めて顔を近づけてくる。ベッドに片手をつき、逃げ場を塞ぐように。冷たい呼気が。幽霊にも吐息があるのだとこんな場面で初めて知った。

「誰のことを考えていたでありますか」

その問いに心臓が握り潰されるかのように軋んだ。

「……っ」

「答えてほしいであります。自分は知りたい。沙織殿が誰を思っただけをしようことをしていたのか」

近い。あまりにも近い。爛々と、爛々と光るその目から逃れられない。

「……し」

声が掠れて上手く出ない。

「し……？」

「……史輝、さんの……こと」

蚊の鳴くような声。自分の耳にすら届いたか怪しいほどの消え入りそうな囁き。けれど史輝にははつきりと届いたらしい。

手首を掴む力が一瞬緩み……直後、彼の顔がぱっと明るくなった。

「自分でありますか!!」

大音声が復活した。至近距離で耳が痺れる。さっきま

での獣じみた妖しい雰囲気は何処へやら、この軍人は全身で喜びを表現するかのように目を見開き、口元を綻ばせ、白手袋の拳を握りしめている。

「自分のことを考えながら、沙織殿は……っ、そうでありましたか……！」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに声を弾ませる史輝に、羞恥で死にそうになりながらも胸の奥がきゆうと甘く締まるのを感じていた。こんな顔で喜ばれたら恥ずかしさだけでは済まない。

「あ、あの、忘れてください、今のなし」

「忘れられるはずがないであります！これは自分にとって最上の報告であります！」

「報告って……」

「沙織殿」

不意に声のトーンが下がった。大声の余韻が消えた部屋に静かで真剣な声が降ってくる。史輝は私の手首をそつと放し、代わりにその手を両手で包み込むように握った。手袋越しの冷たさが火照った掌に染み渡る。

「……お願いがあります」

「な、何ですか」

「自分に、手伝わせてもらえないでありませんか」

一瞬何を言われたのか理解できなかった。手伝う。何を。自慰を？理解が追いついた途端顔から火が出るかと思つた。

「む、無理です、そんなの……！」

「何故でありますか」

「何故って……恥ずかしいに決まってるじゃないですか……！」

「しかし、自分の事を考えてくれていたのでありましよう？ ならば自分が直接、沙織殿の力になりたいであります」

何という理論展開。軍人式の論理で押し切ろうとしているのか、それとも本気で言っているのか。多分両方なのだろう。史輝の目は真剣だった。爛々とした光は消えていないけれど、その奥に滲む懇願のような色を見間違えるはずがない。

「沙織殿が嫌ならば自分は即座に撤退するであります。しかし……」

握られた手に僅かに力が込められた。

「嫌でなければ、どうか」

ずるい。その声で、その目で、そんなことを言うのはずるい。

嫌ではなかった。嫌なはずがなかった。だって先ほどまでこの人のことを考えながら身体を疼かせていたのだ。この人の手に触れられることを想像して息を乱していたのだ。それを本人の前では言えないだけで。

俯いたまま随分と長い沈黙が流れた。壁時計の秒針が何度刻んだか分からない。やがて私は、小さく、本当に小さく頷いた。史輝の指がそつと私の顎を持ち上げる。顔を上げた先にあったのは、これまで見たどんな表情よりも優しい、けれど奥底に確かな熱を湛えた軍人の顔だった。



「……感謝するであります」  
囁くような声が夜の部屋に静かに溶けていった。

小さく頷いた瞬間から部屋の空気が変わったのが分かった。史輝はベッドの縁に腰を下ろし私と向かい合う形になった。白手袋の手がゆつくりと持ち上がり私の肩に触れる。キャミソールの細い肩紐に指が掛かった、その瞬間。

「……脱がせてよいですか」

確認の言葉。その律儀さに恥ずかしさと安堵が同時に押し寄せてくる。声が出なくて、もう一度だけ頷いた。

白手袋の指先が右の肩紐をそっと外す。次いで左。するすると布が滑り落ちて、鎖骨から胸元にかけての肌が

夜気に晒される。史輝の視線がそこに注がれているのが分かって反射的に腕で胸を隠そうとした。

「隠さないでほしいであります」

低い声で制される。命令ではなく懇願に近い響き。

「沙織殿の身体を、見せてほしい」

その声に従うように少しだけ腕の力を緩めた。史輝の手がキャミソールの裾を掴みゆっくりと引き上げていく。頭を通して脱がされると上半身には何も残らなかった。夜風が乳首を掠めて思わず肩が竦む。

「……綺麗であります」

眩きがやけに近くで聞こえた。顔を上げると、史輝が食い入るように私の胸を見つめていた。爛々とした、けれどどこか敬虔にすら見える眼差し。怖い顔だと常々思っ

ていたのに今この瞬間は、ひどく真剣で、ひどく優しい顔に見えた。

「次は……下も、よいでありますか」

返事を待って史輝の手が腰に伸びる。先ほど自慰の途中でずらしたままだった下着に指を掛けられる感触に羞恥で頭がくらくらする。ゆっくりと、焦らすような速度で下着が引き下ろされていく。太腿を、膝を、足首を通して、薄い布がベッドの上に落ちた。

一糸纏わぬ姿。幽霊の前に全裸を晒している。その事実が脳を灼くように熱い。両手で顔を覆いたい衝動を必死に堪え、視線を逸らして唇を噛む。

史輝は暫くの間何も言わなかった。沈黙が長くて不安になって恐る恐る視線を戻すと。泣きそうな彼の顔。

「し、史輝さん……？」

「……申し訳ない。あまりにも嬉しくて」

声が僅かに震えている。目元を拭う仕草がやけに人間くさくて、胸の奥がぎゅっと締め付けられる。

「自分は……沙織殿の裸身を拝見出来る日が来るなど、思ってもいなかったであります。夢であるなら覚めないでほしい、そう思うほどに」

幽霊が夢を見るのかは分からないけれどその言葉に込められた感情の重さは確かに伝わった。彼はどれほどの時間をこの屋敷で独り過ごしてきたのだろう。誰にも触れられず、誰にも触れることなく。

「……夢じゃないですよ」

私が小さく言うのと、史輝は深く息を吸い込みそれから

ゆっくりと頷いた。

「では、触れさせていただくであります」

両手で包み込むように左右の乳房に手が添えられる。手袋越しの冷たさが火照った肌に触れた瞬間小さく息を吞んだ。大きな手。私の胸がすっぽりと収まってしまふほどの軍人の掌。その手がゆっくりと形を確かめるように揉み始める。

「ん……っ」

優しい力加減。押しつぶすのではなく掬い上げるように、柔らかさを味わうように。指が乳房の丸みに沿って動いたびに肌の上を滑る手袋の布地がさらさらと擦れ、微かな刺激が神経を伝っていく。

「柔らかいであります……これほどまでに柔らかいもの

でありますか」

感嘆を滲ませた声が頭上から降ってくる。両手が緩やかに円を描くように揉み続け、時折ふにりと指先に力が込められるたびに乳房の形が変わるのが自分でも見えて、恥ずかしさに顔が熱くなる。やがて、親指の腹がそっと乳首に触れた。

「……っ」

小さく跳ねた肩を史輝は見逃さなかった。

「ここが敏感でありますか」

確認するように親指の腹で乳首の先端をそっと撫でる。布越しの感触は直接触れられるよりも曖昧で、焦れつつもどかしい。くるくる♡と円を描くように擦られ、乳首が徐々に硬くなっていくのが自分でも分かった。

「あ……あ……」

「立ってきたであります。沙織殿の乳首、可愛らしいであります」

恥ずかしいことを堂々と言う。しかもその声が嬉しそうで、耳から入ってくる言葉の一つ一つが身体の芯をじゅんわりと疼かせる。右の乳首を親指と人差し指で摘まれくりくり♡と転がされる。同時に左の胸は掌全体で揉みしだかれ、二つの異なる刺激が同時に走って腰が勝手にもじもじと動いてしまう。

「反応がよいであります。自分は嬉しい」  
つん、と乳首の先を軽く弾かれた。

「やっ……」

「ここを弄ると、下の方にも響くでありますか？」

返事ができなかった。凶星だったからだ。乳首を弄られるたびに下腹部の奥がきゆう♡と疼き、さっきの自慰で中途半端に昂ぶったままの身体が敏感に反応している。太腿の間にじわりと熱が集まっていくなを必死に隠そうとして脚を閉じた。

史輝は微かに笑みを浮かべ、両手を乳房から離れた。触れられていた箇所が急にひやりとして不意に物足りなさか胸を過ぎる。次の瞬間、指先がゆっくりと下へ降りていった。鎖骨から胸の谷間を抜け肋骨の上を辿り、臍の横を掠め、下腹部へ。

その手が太腿の内側に触れた瞬間、反射的に脚を閉じた。

「……開いてほしいであります」



「む、無理です……」

「自分が手伝うと言ったでありましょう。であれば、こ  
こも見せていただかなければ任務を遂行できないであり  
ます」

任務。この人は今これを任務と言った。真剣な顔で。  
恥ずかしいことこの上ないのに、そのあまりの生真面目  
さに引き攣ったような笑いが込み上げてきてしまう。

「……笑ったでありますか？」

「だって、任務って……」

「大切な任務であります」

迷いのない断言。その声にまた笑いそうになったけれ  
ど、白手袋の手が膝にそつと添えられた感触に笑いは途  
中で息を呑む音に変わった。

優しく、有無を言わさない力で両膝がゆつくりと押し開かれていく。抵抗しようにも力が入らない。夜気が、それまで閉じていた太腿の間にすうっと触れて秘部が空気に晒される感覚に身体が震えた。史輝の視線が、真っ直ぐにそこへ注がれた。

「……………」

沈黙。長い、長い沈黙。耐えきれなくなつて顔を覆おうとした時、史輝が呟いた。

「……これが、沙織殿のおまんこでありますか」

心臓が跳ね上がった。この人の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった。しかも声色はあくまで真剣で、観察するような、確認するような響きを帯びている。白手袋の指が恥丘にそっと触れた。産毛の上を撫でるよう

に降りていき割れ目に沿って上から下へ、一筋の線を引くように辿る。

「あ……っ♡」

「湿っているであります。先ほどの自慰の影響でありますな……ここ、柔らかいであります」

指先が割れ目をそつと押し開いた。人差し指と中指で左右の唇を丁寧に開かれ内側が夜気に触れる。ひんやりとした空気と自分の身体から漏れる熱気が混ざり合う。見られている。あの目に、いちばん隠したい場所を一分の隙もなく観察されている。

「う……見ないで……」

「見るであります。自分は今、沙織殿の全てを見たいであります」

指が更に広げられ、小陰唇の内側が完全に露わになる。史輝がぐっと顔を近づけてきた。ランプの灯りが彼の肩越しに差し込み、あろうことか私の秘部を明るく照らし出す。

「……ここが尿道口でありますな。そしてこの下が膣口……ここに、膜が見えるであります」

「っ……！」

「処女膜であります。薄く張っている……沙織殿、経験がないでありますか」

頭から湯気が出そうだった。顔を覆った両手の隙間から辛うじて声を絞り出す。

「……ない、です」

「そうでありますか」

その声が明らかに喜びを含んでいた。見えないけれどもきつと今、とんでもなく嬉しそうな顔をしている。

「綺麗であります。沙織殿のおまんこ、薄桃色で綺麗であります。自分は感動しております……ここの褄がこう重なつて、奥の方が少し赤みを帯びていて……」

「やめてくださいっ、実況しないで……！」

「しかし報告は軍人の基本であり」

「今は軍人じゃないって言ったでしょう……！」

涙目で訴えると、史輝はほんの少しだけ申し訳なさそうな顔をしたけれど反省しているようには到底見えなかった。手袋の指は恥部を押し開いたまま動こうとしない。

「……では、実況は控えるであります。その代わり」  
指先が陰核の包皮に触れた。

「ここを、触らせていただく」

包皮のすぐ下に隠れた小さな突起を、親指の腹がそつと押した。

「ひあっ……♡」

腰が跳ねた。先ほど自分で触れたときとは比べものにならないほどの鮮烈な刺激が下腹部から背骨を駆け上がっていく。他人の手はこんなにも違うものなのか。しかも手袋の布地が湿った粘膜に触れる感触は独特で、微かにざらついた繊維が敏感な先端を擦るたびに視界がちかちかとも明滅する。

「あ、あ♡そこ……だめ……♡」

「だめでありますか。しかし、沙織殿の身体はだめとは言っていないようであります」

くりっ♡と親指が陰核を転がした。同時に中指の腹が膣口の周りをなぞり、溢れ出した愛液が手袋を濡らしていく。

「ぬるぬるであります。こんなに濡れて……嬉しいであります、沙織殿が自分の手で感じてくれて」

くちゅ♡くちゅ♡♡と湿った音が部屋に響く。恥ずかしい。こんな音を立てている自分の身体が恥ずかしい。けれど史輝の指が陰核を的確に捉えるたびに快感の波が押し寄せ、羞恥を感じる余裕すら奪われていく。

「あっ♡ああっ……♡♡ん、んっ……♡♡」

「声を出してよいであります。この屋敷には自分と沙織殿しかいないのだから」

指の動きが速くなる。くりくりと円を描いていた愛撫

が陰核の先端を集中的に上下に擦る動きに変わり、快感の密度が一気に跳ね上がった。

「ひっ、あ、あああっ……♡♡♡だ、だめ、そんなに速く……っ♡」

「だめと言いながら腰を押し付けてくるであります。正直な身体でありますな♡」

ずるい、ずるい。この人はずるい。あの真面目な顔と声でこんなことを言いながらこんなことをする。

不意に指が離れた。ぬるりとした感触が消え敏感になった陰核が夜気に触れてひりひりと疼く。え、と思ったのも束の間、史輝がベッドの上で姿勢を変え私の両脚の間に顔を持っていった。

「な……何を」



「舌でやらせていただくであります」

返事を待たずに史輝の顔が恥部に埋まった。

最初に感じたのは冷たさだった。幽霊の舌はひんやりとしていて、火照った粘膜に触れた瞬間にぞくりとした震えが背骨を走る。その冷たい舌が陰核の包皮をゆつくりと押し上げ、剥き出しになった小さな突起をねつとりと舐め上げた。

「ひいっ……♡♡♡」

声が裏返った。指とは次元の違う、柔らかくて温度があって生々しい刺激。舌の表面の微かなざらつきが陰核の先端を撫でる度に脳の奥で火花が散るような快楽が弾ける。

「んっ♡あ、あっあっ……♡♡舌、舌だめ、直接だめ

え……っ♡」

じゆる♡と吸い付くような音が響いた。史輝が陰核を唇で挟み、ちゅうっ♡と吸いながら舌先でちろちろ♡と先端を弄っている。その執拗な刺激に腰がガクガクと震え始めた。逃げようと身体を引いても両腿を掴む大きな手が逃がしてくれない。白手袋が太腿の柔らかい肉に食い込み脚を開いた状態で固定される。

「んんうっ……♡あ、ああ……っ♡史輝、さ……っ♡」  
 ずず♡と舌が陰核から膣口へと降りていく。入り口の周りをねっとり舐め回し、溢れ出す愛液を掬うように舌を動かしてから再び陰核へと戻ってくる。その往復が繰り返される度に下腹部の奥で快楽の塊がどんどん膨張していくのが分かった。

「沙織殿のここ……美味いです」

くぐもった声が恥部に直接響き振動が陰核に伝わる。

「そんなこと言わないでっ……ひっ♡♡♡」

れろ♡れろ♡♡と舌が陰核を横に擦る。左右に上下に、円を描いて吸い付いて、離してまたくわえ込む。規則的なようできて微妙にリズムを変えてくる舌使いに翻弄され自分がどんな声を出しているのかも分からなくなっていく。シーツを掴んでいた手がいつの間にか史輝の頭に伸びて押し付けるように抱え込んでいた。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡♡じゅるる♡♡♡と卑猥な水音が途切れなく響く。

「あっあっあっ……♡だめ、もう、だめ……♡何か、来てっ……♡♡♡」

下腹部の奥で凝縮されていた熱の塊が臨界点に達しようとしていた。つま先が痺れ太腿の内側がぶるぶると痙攣し、背中がシートから浮き上がる。

その瞬間、史輝の舌が陰核の先端を真下から勢いよく撥ね上げた。同時に唇が吸い付き、ちゅるるっ♡♡♡と音を立てて吸引される。

「ひあああああっっ♡♡♡」

身体の中から爆ぜた快楽が全身を貫いた。視界が白く飛び意識が一瞬だけ途切れる。腰が大きく跳ね上がり、史輝の顔を挟み込むように太腿が閉じかけたけれど両手で押し戻される。

ぴゅくっ♡ぴゅくっ♡♡と恥部から透明な液体が噴き出すのが分かった。自分の身体から飛び出したそれが史

輝の顔にかかり、シーツを濡らしていく感覚を朦朧とした意識の中で感じている。

「……っ、は……あ……」

絶頂の余韻が波のように引いていく中史輝がゆつくりと顔を上げた。軍帽が少しずれて、潮で濡れた顔がランプの灯りに照らされている。切れ長の目を細めて、彼は幸せそうに笑っていた。

「……潮を吹いたであります。沙織殿、素晴らしい」

恥ずかしさのあまりに腕で顔を覆ったけれど、その奥で心臓は甘く疼いている。まだ身体がびくびくと小さく痙攣し、太腿の間をつうと伝い落ちる液体の感触が先ほど何が始まったのかを生々しく思い出させた。

自分で触れるのとは違う。全く違う。他人の手で、他

人の舌で達するというのが、こんなに。思考がまとまらないまま荒い息を繰り返しているとベッドが軋む音がした。身体を起こした史輝が軍服のボタンに手を掛けている。濡れた顔を袖で拭いながら史輝は一つ一つボタンを外していく。白手袋を先に外したその素手は想像していたよりもずっと大きくて、骨ばっていて、無骨だった。軍服の上着が肩から滑り落ちる。その下から現れた身体に息を呑んだ。